

第7章 支笏湖スタイル（支笏湖版脱炭素シナリオ）

7-1 国立公園支笏湖

7-2 支笏湖スタイル



7-1 国立公園支笏湖

支笏湖は、およそ4万年前に支笏火山の噴火でできた陥没地に水が溜まって形成されたカルデラ湖です。名前の由来はアイヌ語で“大きな窪地”を意味する「シコツ」が語源と言われ、古くから千歳の貴重な水源とされてきました。最大深度約360m、平均水深約265mと国内では秋田県の田沢湖に次いで2番目の深度を誇る日本最北の不凍湖で、昭和24（1949年）には、支笏湖地区と洞爺湖地区が支笏洞爺国立公園として国立公園に指定されています。水中の栄養分が少なく、プランクトンの発生も少ないことから透明度が高く、これまで何度も環境省の湖沼水質測定結果で日本一に選ばれています。

支笏湖地区では、千歳川に明治後期から昭和初期にかけて設置された王子製紙水力発電所からの電力の供給を受けており、国立公園でも希少な電力ゼロカーボン地域です。また、支笏湖地区の美しい自然環境を後世に引き継ぐため、スノーモービルの乗入れ規制や動力船の乗入れ禁止などに地域が主体的に取り組んできており、これまでの活動が評価され、令和4年3月29日に全国で6番目となる環境省のゼロカーボンパークに登録されました。



国立公園支笏湖



7-2 支笏湖スタイル

支笏湖地区の脱炭素に向けた指針として「支笏湖スタイル」を構築し、地域住民や事業者が主体的に自然環境に配慮したエリア全体の脱炭素化やサステナブルな観光地づくり、国立公園利用者への普及啓発などに取り組んでいきます。

目指す姿： 地域住民や事業者、観光客、行政が一体となり、支笏湖地区の脱炭素や脱プラスチックに取り組み、全国の国立公園のショーケースとなるサステナブルな観光地。

今後の取組

(1) 再生可能エネルギーの活用

- ・支笏湖地区は、千歳川に設置されている王子製紙株式会社の水力発電所で発電されたカーボンニュートラル電力によって大部分が賄われている地域です。今後は電力だけでなく熱利用での再生可能エネルギーの活用を推進します。



支笏湖レンタサイクル（電動自転車）

(2) 二次交通の脱炭素化

- ・周辺の散策などの移動手段として、支笏湖ビジターセンターで電動自転車の貸し出しを行っていることやEV充電設備を整備し、水力発電のカーボンニュートラル電力を利用した地域全体で移動手段の脱炭素化を推進しています。



ゴミ拾いダイビングの様子

(3) ゼロカーボン又は環境配慮型アクティビティの推進

- ・ゴミ拾いダイビング等の環境配慮型アクティビティを実施していることに加え、湖面のパトロールへの電動船の導入検討など、アクティビティだけではなく支笏湖の管理においてもゼロカーボンを目指しています。

(4) サステナブルな観光地づくり

- ・支笏湖を代表する冬のイベントである「氷濤まつり」で、除伐・伐採木の使用や落ち葉を入場券として使用する等、環境に配慮した取組みを行っています。



千歳・支笏湖 氷濤まつりの様子

(5) 温室効果ガス排出量の見える化

- ・事業者、観光客、地域住民といった支笏湖地区全体の温室効果ガス排出量「見える化」を推進します。

(6) 脱プラスチック

- ・ペットボトルやレジ袋などのプラスチック製品を極力利用しない、「脱プラスチック」の取組を推進します。



「森づくり」を行う過程で発生する除伐・伐採木を氷像の資材として活用

(7) 全国のゼロカーボンパークとの連携

- ・全国にあるゼロカーボンパークと連携し、普及啓発や情報発信を行うなど、力を合わせて魅力的な観光地を目指します。

コラム 14

ゼロカーボンパークとは

- ・国立公園における電気自動車等の活用、施設における再生可能エネルギーの活用、地産地消等の取組を進めることで、国立公園の脱炭素化を目指すとともに、脱プラスチックも含めてサステナブルな観光地づくりを実現していくエリアのことを呼びます。
- ・国立公園をカーボンニュートラルのショーケースとし、訪れる国内外の人たちに脱炭素型の持続可能なライフスタイルを体験して頂く場作りを目指しています。

※12 地区が登録（R5.11 現在）

